伝説の里

下巻

宮野村子

青樹社刊

伝説の里（下）

昭和三十八年七月十日　印刷
昭和三十八年七月十五日　発行

定価　三八〇円

著者　宮野村子
発行人　土井勇
印刷人　山森忠一

発行所　有限会社　青樹社
東京都千代田区
神田神保町二ノ一八
電話（301）〇五四五番
振替東京四七六四八

—落丁・乱丁本はお取替え致します—

目次

第一章　さぐり合い　七
第二章　黒眼鏡の男　三
第三章　苔蒸す祠　三七
第四章　鯉の池　五六
第五章　相似の面影　七五
第六章　君ゆえに　九一
第七章　鎧のある座敷　一〇八
第八章　証拠の品々　一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第九章　悪い血　一三七
第十章　遠くの声　一五三
第十一章　密告　一七九
第十二章　恋する処女　二〇二
第十三章　夜の影　二一八
第十四章　崖の上　二三六
第十五章　狂つた判断　二五〇
第十六章　女の情　二六六

装幀　山崎百々雄

伝説の里（下）

第一章　さぐり合い

「やあ、お早う。早いんですな。おねえさんは――」
寝間着姿でふらりと廊下に出た泉京太は、窓の傍に立つて外を眺めている藤山菊代を見ると、狎れ狎れしく呼びかけて近づいた。菊代はにつこりして振り向いた。山をみつめていた時のさびしい色は拭つたように消えて、弟を見るような優しい眼差しになつていた。
「お早う。泉さんはまたどうなすつたの？　いつもごゆつくりだのに、今日はいやにお早いのね？」
「昨夜少し飲みすぎたせいか、頭が痛くてね――」
「いけませんね、それは――お薬でも差上げましようか？」
「いや、大丈夫です。朝の空気の方が薬よりも利くらしい。こうしているうちに、だんだん頭が軽くなつて来た――しかし、いい景色だな」
京太は小さなあくびと一緒に伸びをして、眠そうな眼をしばたたきながら山を眺めた。
「東京あたりのごみごみしたところにいると、こういうのどかな風景は、ちよつと想像がつきません

ね。緑というものが、こんなにあざやかな美しいものだということを、僕は長い間忘れていた。出来れば、一生でもここに住みたい位です」

「どうぞ、お望みなら、ほんとに一生いて下さつても構わないんですよ。景色がいいだけで。ほかには何にも取り柄はないけれど、それでもよろしければね——」

菊代は愛想のよい言葉つきで言い、横眼でちらりと京太を見た。ふん、一生か——吉川正造のようにどこかで殺されて、行方不明ということになつてか——京太は思わずかすかに歪みそうになつた顔を、大きなあくびでごまかした。

「有難いが、考えるとやつぱりそうは出来ませんな」

「あら、どうして？」

「貧乏暇なしで、あくせくと動きまわる癖がついているから、あんまり暇すぎると、退屈で死んでしまうかも知れんですからな」

「ご自分で何かなさればいいでしょう」

「何をです？　僕みたいながさつ者に出来ることが何かありますか？」

「ご自分で週刊誌をおつくりになつたら？……人に使われるんじやなくて、人を使つておやりになるのよ。出来るだけのお力になりますよ」

「それはどうも——ぜひお願いしますと言いたいが、だが、やはりここでは駄目です」

「何故？　地方の小さな町から出ている新聞だつてあるんですもの。こういう田舎から出る週刊誌があつてもいいわけでしよう？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「それはその道理ではありますがね、しかし、週刊誌と新聞とはやはり自から違いがあつて、週刊誌は週刊誌らしい種がなければ駄目なんです。こういうのどかなところじや、種の拾いようがない…」
「種はあるじやありませんか。こないだの吉川さんの事件なんか、東京あたりでもめつたにないほど不思議な出来事じやないか知ら?……大の男が煙みたいに消えてしまうなんて……」
こんな田舎で週刊誌など出せる筈がないことを、頭のよいこの女が知らない筈はないのに、突然妙なことを言い出したと思つたら、なるほど、それが言いたかつたのか、こちらの気持ちを探つているのだな、と京太は覚つた。
「ああ、あれですか」
山をみつめた眼を細めて、京太は興味もなさそうな口調でいつた。
「消えたといえば、たしかに不思議だし、奇怪極まる事件ではあるけれど、しかし、僕はそうは思いませんからね」
「では、どうお思いになるの?」
「僕は、吉川さんはうまく人の眼をくらませて、春元家から抜け出したんだと思つています。吉川さんが出るところを見た者は一人もないというけれど、えてして人間というものは、こういう場合、何となく事あれかしの気持から、妙に誇張した言い方をしたがるもんでしてね——だから、僕が考えるには、その時、春元家の屋敷にいた者の全部が全部、皿みたいな大さな眼で吉川さんを見張つていたわけじやないだろうし、東京から来た清風館のお客さん、というわけで、初めは珍らしがつて眺めていた者も、だんだん見慣れて、吉川さんが傍を通つても、別に気にもとめなくなつていたに違いない

と思うんです。だから、ちよつとの隙を見て抜け出す位のことはわけもなく出来る……」
「そうか知ら?……でも、何故そんなことしたんでしよう?」
「商売ですよ」
「商売?……」
「そうです。あの人は、土地や家屋の売買や周旋が商売ですからね。庭をぶらぶらしているうちに、どこかにいい土地があるとか何とか、そういう話を聞きこんだんでしよう。多分——それで真ツ先に駈けつけて、早いところ手を打とうとしたんだと、僕はそう思いますね」
「でも、わたし達にも黙つて行くなんて……」
「だから、そこが商売だというんですよ。商売上の秘密だから、あなたにも藤山さんにも知られたくなかつたんでしよう。いない人の蔭口をいうようで何だけれど、これはまあ内証の話として聞いて下さい。地方の人から見ると、東京の人間は全部、悪がしこくて素ばしツこくておつかないと思うでしよう? 生馬の眼を抜くという言葉は、今だつて結構いえる言葉ですよ。ところが、その東京の人間が、これこそ生馬の眼を抜くようだとおつかながつているのが、吉川さんのような、ああいう商売の人たちなんですからね。あの人たちは金儲けのためなら、人を出し抜いたりだましたりする位のことは、平気でやりますからね」
「そうですか。でも、吉川さんはそんな方には見えなかつたけれど……文夫にもいいうちを世話して下さつたし……」
「人は見かけによらない、と言いますからね。いいうちを世話してもらつたなんて、あなたの方じや

有難がつて居られるけれど、それはあなたの方で、金はいくらかかつても構わないという鷹揚な条件を出されたからだし、吉川さんだつて、普通よりよけい儲けているにちがいないですよ」
「そうでしようか？――では、吉川さんはまたここへ戻つていらつしやるか知ら？……」
「さあ、それはちよつとわからないな。何かうまい言いわけを考えながら、案外澄ました顔で戻つて来るかも知れないし、金儲けを急げば、知らん顔で東京へ帰つてしまうかも知れないし……近くの駅から、吉川さんらしい人が汽車に乗つた様子もないというけれど、男一匹が知恵を絞れば、相当長い間、人の前から姿をかくす位のことは、案外、簡単に出来るんじやないのかな？　別に心配することはないと思いますよ。――実をいうと、僕もね、これで何か面白い記事をつくれないかな、と考えたんですよ。毎日あくせくと駆け廻つている社の連中のことを考えると、こうして酒を飲んで遊んでいるのが何だか悪いような気がしてね――菖蒲祭りで消えた男、なんてのは、ちよつと面白いんじやないかと思つたんだが……」
「書けました？　記事は――」
「いや、駄目でした。記事が出た頃、本人がのほほんと現われては、週刊誌はいい笑い物になるし、僕は忽ちくびになつてしまうにちがいない……」
「くびになつたつて構わないじやありませんか？　わたし達は、あなたがご自分で何か事業でもおやりになれるだけのことをして差し上げようと思つているんですから……」
「いや、それにしても、しくじりでくびになるのはまずいですからね」
「それもそうかも知れませんね。――わたしはね……」

菊代はちらりと京太を見て、美しく化粧した頬に、うすいわらいを浮かべた。
「あの晩――吉川さんの姿が見えなくなつた晩、あなたが何か考えこんだ様子で酒ばかり飲んでいらしたと、女中から聞いた時、わたしと文夫が吉川さんを殺したんだと思つていらつしやるんじやないかと思つたんですよ」
「いやだなあ。あんまり変な風に拗ぐるのはやめて下さいよ」
京太はふと鋭どくなりかけた瞳を細めて山へ向け、駄々つ子じみた声を出した。
「ちよつと何かあつたからといつて、そんな風に気を廻す位なら、いくら誘われたつて、ここまで来やしませんよ。吉川さんだつてそうでしよう。とにかく、吉川さんが姿をかくしたのは、何かの理由、それとも必要があつてのことでしよう。そういつちや何だけど、あんな人たちは始終、法律すれすれのことをやつているんだから、少々あくどいことをし過ぎて、今度は法律にひつかかりそうなはめにでもなつたか……東京からすぐ姿をかくすと足がつき易いから、藤山さんから誘われたのを幸い、わざとここまで来てから、見事な神がくれをやつてのけたか……いずれ、そのどちらかにちがいないと、僕は考えていますがね」
「そう……どちらにしても、わたしはやつぱり、早く戻つていらして、何故こんな心配をさせて下さつたのか、はつきりと理由をうかがいたいと思いますよ。わたし達は、吉川さんのこともいろいろ考えていたんですのに、人の気も知らないで、と言いたくなりますよ。ほんとに――土地がお望みなら、無理なことをなさらないでも、何とかして差し上げられたのに……」
菊代は山の方を望みながらつぶやくように言い、急に小さくふつとわらつた。

「何ですか？」
京太は戸惑った眼を向けた。
「いいえ、別に何でもないんですけど、ちょっと感心したんですよ」
「何をです？」
「週刊誌の記者の方って、よくいろいろとお考えになるものだと思って……まるで私立探偵みたいですわね？」
「いや、どうも、お褒めにあずかって恐縮ですな。実はそれほどでもないんだが……」
京太はふと狼狽しかけた気持ちを、とぼけたわらいにまぎらせた。
「そういうお言葉は皮肉みたいで、少々頭が痛いです。習い性となる、とはこういうことをいうんでしような。われながら味気ない癖だと思うが、これも商売となれば仕方がないです。だが、これも一種の慣れでしような？　案外、この勘が当たることがあるんですよ。吉川さんのことはきっと当たりますよ。賭けをしてもいい——」
「では、あなたの勘を信じて、吉川さんが現われる日を待つとしましようか」
「それがいいです。よけいなことに気を使って、その美しいお顔を、憂いにくもらせるのはもつたいないですよ」
「お上手を仰言ること——冬子に怒られやしませんか？」
「いや、どうも——」
京太は照れたように頭を掻いた。

「おとなしいいい女でしよう？」
「いい人ですね、全く――おとなし過ぎて無口なところが、少々物足りないような気もするが……」
「自然の花はお好きじやないようだけれど、人間の花はお好きなのね？」
「無論、人間の花は好きですが、かといつて、自然の花も嫌いなわけじやありませんよ」
京太はけろりといつて、顎を撫でた。
「年中くだらないことばかり考えてるおかげで、藤山さんのように、詩を書いたり小説を書いたりする詩情はなくしてしまつたけれど、自然の花を眺めて愛でる位の風流心はまだちよツぴり残つていますよ。その証拠には今日か明日あたり、菖蒲祭りを見に行こうかと思つているんです。せつかくここまで来ながら、有名な菖蒲を一度も見なかつたなんてことになつては、何だか花に対して礼儀を欠くような気がしますからね」
「そうね、あの菖蒲は、一度ご覧になつてもご損はありませんよ。いらつしやるなら、わたしが文夫がご案内致しましよう」
「いや、あなたはお店の采配で忙しいし、藤山さんは仕事中なんでしよう？」
「ええ、ここにいる間に、何か短いものを一つまとめたいと言いましてね」
「偉いなあ」
京太は大仰に感嘆してみせた。
「僕らみたいなぐうたらとは心掛けが違う。だから、ああいういいものが書けるんだな。僕は、藤山さんはきつと大成すると見ていますよ。処女作が盗作だなんていわれたのは、要するに、あれは一種

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.